

ct

さすらう人々

de
Blanca Doménech

traducción de
Junko Okamoto

(fragmento en japonés)

ブランカ・ドメネク・カサレス 作
岡本淳子 訳

第一幕 搜索

退廃的な雰囲気のある避難所内のガラス張りのポーチ。数卓のテーブルと数脚の椅子。その椅子のいくつかは折りたたまれ、壁際に積んである。ロッキング・チェアとハンモックが一つずつ。鏡の付いた洗面台、その上には洗面用具。そのポーチは丸いリビングに続いており、リビングの壁には切抜き（写真、雑誌、イラスト、新聞記事など）が貼ってある。螺旋階段と折りたたみ式の鏡張りの衝立。暗がりのなか、ポーチに人が二人いるのがわかる。一人はオリベルで、ロッキング・チェアに座り、ゆっくりと機械的に椅子を揺らしている。ロッキング・チェアは錆びついた音をたてている。もう一人のディアナは薄暗い隅にいるため、その姿はほとんど見えない。洗面台の正面に座り、鏡をじっと見ている。
ある冬の夜。

オリベル あの音、聞こえた？

(沈黙)

オリベル 聞こえなかった？ ひゅーって音。遠くで鳴っているひゅーって音。(間) まただ。またあのひゅーって音が響いている。聞こえる？

ディアナ いいえ。

(沈黙)

オリベル あの音、何度も鳴っている……。何度も。きしむ音。岩と岩がぎしぎしと……。岩と岩がぶつかる音。岩と岩とがひしめき合って。(間) 遠くに聞こえるひゅーって音。風が突然止んだ。重い空気を含んだ大きなつむじ風が吹いて、その直後、完全にすべてが止まった。ちょっとだけ外に出てみた。今夜の空気の密度を分析したかったから。肉屋の日よけが……。動いていなかった……。わかるか？ まったく動いていなかった。完全な静止。そして、今……。 (間) 聞こえた？

ディアナ 何が？

オリベル 音。

ディアナ いいえ。(沈黙) 聞こえない。

(オリベルはディアナに近づく。一本のろうそくに火をつける。すると、洗面台の鏡に明かりが反射する。反射光はポーチのほうまで届き、あらゆる方角に伸びているように見える。鏡に映るディアナの姿と、彼女の右目の義眼が放つ究極のきらめきが際立つ。舞台が弱い光を取り戻す。オリベルは彼女の後ろに行き、彼女の肩に両手を乗せる。二人は鏡越しに見つめあう)

オリベル ちゃんと聞いてた……？

ディアナ ちゃんと聞いてたって……。今？

オリベル 音の話をしていただろう。何かがいつもとは違うって言っているんだ。聞きなれない音なんだよ。聞きなれない音。岩と岩がそんなふういきしむのを聞いたことがない。岩と岩とがぶつかりあって、風はまったく吹いていない。いつもと何かが違う。

ディアナ 肩を抑えないで。

オリベル 何か奇妙なことが起きるって言っているんだ。

ディアナ 抑えつけないで。

オリベル 空気が濃くなっている。肉屋の日よけが動いていない。

ディアナ 放して。

オリベル 何か奇妙なことが明らかになりつつある。胸騒ぎがする。胸が締め付けられる。肉屋の日よけが……。

(沈黙。二人の視線が鏡越しに交差する。オリベルは後ずさりして、再びロッキング・チェアに座る。目を閉じる。同時に、ディアナが立ち上がる。沈黙)

ディアナ あなたが行ってしまった時。(間) あの時。何年も前。十年か九年前。十年前。あなたは冬の間ずっといなかった。あなたが戻ってくるのか、あなたにもう一度会えるのか、誰にもわからなかった。あなたは言わば、まだ子供だった……。でも、その後……。曇り空のあの日。空は暗くて、黒光りしていて、信じられないくらい黒かった。あなたの顔は汗でびしょりだった。汗が首に流れ落ちていた。あの冬……。誰もあなたが戻ってくるとは思っていなかった。あなたは永久に消えてしまう子供たちの一人だった。時間の経過とともにぼやけていく顔。二度と再び会うことのない人たちのことを、私たちはもっともタイミングの悪いときに覚い出す。稲光のようにその人のイメージが現れて、一瞬にして消える。あなたが戻ってくるなんて誰も思わなかった。

オリベル 僕は戻ってきた。でも、あいつらは……。

(沈黙。ディアナは再び洗面台に戻る。腰を下ろす。鏡をじっと見つめる。自分の顔を観察する。オリベルは不安げなリズムでロッキング・チェアを揺らし始める)

オリベル あの冬、何があった？

ディアナ 何もなかったわ。

オリベル つまり、どうして……。？ってこと。

ディアナ 何もなかったわ。
 オリベル 何度もそうだ。あの冬の話になるたびにそう。時々……。つまり……。こんな感じがする。あの冬、何か完全に崩壊したみたいな感じ。重要な何か死んだのに、埋葬さえされなかった。大きな疑問符のように何か宙ぶらりんになった。

ディアナ 何もなかったわ。
 オリベル それじゃ……。何だったんだ……。？ 何が起こりえた……。？
 ディアナ 何もなかったの！
 (沈黙)
 オリベル どうしてその話を持ち出したんだ？
 ディアナ どうして……。？
 オリベル 何のために。
 ディアナ そんな話し方、やめて
 (間)
 オリベル いつもと同じ冬。まためぐって来た冬。時間が止まったような空虚な数ヶ月。海に囲まれたこのちっぽけな土地の真ん中で時間が止まった冬。先のとがった岩、襲い掛かるような風、窓の向こうのひゅーという音、真夜中のうめき声。僕が不在だった冬が、悪かったはずはない。

ディアナ 悪くなかったわ。
 (間)
 オリベル 僕にとっても悪くなかった。なんとか再確認できたよ……。結論に達したんだ……。ここに残るべきだったって。海の真ん中のこのちっぽけな土地に閉じ込められたままでいるべきだった。海の真ん中のこの石の欠片だけを頼りに、成り行き任せに。
 (ディアナはガラスの向こうを見る。冷淡な表情で、しばらく背中をピンと伸ばす。すぐに床につぶし、突然、大声で笑い出す)
 ディアナ あなたは出て行かなかった。この島のどこか隅っこに隠れていたんだわ。何ヶ月間か、どこかに隠れていたの。
 オリベル どうしてそんなことを言うんだ？
 ディアナ あなたを見たもの。ある晩、あなたが小道を歩いているのを見たもの。途方にくれていたわ。おそろしいほど放心状態だった。
 オリベル それは僕じゃない。おそらくそれは……。あいつだ……。あいつだったんだ。
 ディアナ あいつ？
 オリベル あいつだ。賭けてもいい。
 ディアナ あなたが言っているのは……。あの人たちのこと？
 (ディアナはなおも床に寝そべっているが、奇妙なポーズを取っている。オリベルはひよいと立ち上がる。彼は窓ガラスに近づく。不気味な視線で外を観察する)
 オリベル しいしいしい……。
 ディアナ あの人たちのことを言っているの？
 オリベル ほら。聞こえた？
 ディアナ 何が？
 オリベル 誰か来る。
 ディアナ え？
 オリベル 来るよ、誰かが。雑草を踏みつける音が聞こえる。ほら。耳を澄ませて……。あれだ。大またで地面を踏んでいる。ものすごく大またで歩いている。地面を踏みつける音。
 ディアナ 何も聞こえない。
 オリベル 角の向こうにいる。
 ディアナ 何も聞こえない。
 オリベル しいしいしい……。
 (ガラス張りのポーチの向こうに、人の姿が見える。社会的に身分のある人のようなシルエット。数分間、ポーチの前でじっとして、中の様子を伺おうとしている)
 オリベル そこにいる。
 (オリベルは玄関に向かう。と同時に、その人物は動揺し始め、うろろうろする。ディアナはさっと起き上がり、再び洗面台の正面に座り、鏡をじっと見つめる。オリベルは扉を開